



郷土資料室だより

鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

第12号



従軍記念盃 (江村英文氏寄贈 17点)

従軍した兵士が帰還した際、餞別や見送りの返礼として親類や近隣の人たちに記念品を贈る習慣がありました。この習慣は、日清戦争での勝利をきっかけに行われるようになり、第二次世界大戦の終戦前まで続いたようです。贈答品の多くは盃で、「凱旋記念」や「退営記念」、「満期記念」などと記され、旭日旗や星章、桜、錨など陸軍・海軍を象徴する図柄が多く使われました。外底には帰還した兵士の名字が記されます。これらは従軍記念盃とか軍猪口などと呼ばれました。

写真の従軍記念盃の内、いくつか内容を紹介しましょう。①は径7.5cm×2.8cm、星と桜に「征露記念」とありますので日露戦争からの帰還のようです。②は径8.2cm×3.3cm、星・日章旗・旭日旗に「近衛歩兵」「第一聯隊」とあり、外底に「竹尾」とあります。③は径8.3cm×3.5cm、星・桐・日章旗・旭日旗に「歩兵第五十一聯隊」「帰休記念」、外底は「宮崎」です。④は径8.2cm×3.2cm、馬上兵に「第三師団」「凱旋記念」。⑤は旭日章に「三重聯隊」「満期記念」とあり、大中小の3個セットのようです。

この郷土資料室だよりでは、郷土資料室で保管する古文書を中心とした史資料について紹介していきます。

郷土資料室

〒513-8701 三重県鈴鹿市神戸一丁目 18-18
Tel 059-382-9031 Fax 059-382-9071

発行/鈴鹿市文化スポーツ部
文化財課
発行日/2022年1月25日

関東大震災目録 『長谷川家文書』編

今号も、『長谷川家文書』から、長谷川家ゆかりの人々の被災状況を紹介したいと思います。（*1）

写真の絵葉書は、二枚共八月二十六日付で、一志郡豊地村（現松阪市嬉野薬王寺町）の宮村信次郎から長谷川孝子（準三夫人）宛に出された「東京の夜」シリーズです。モダンレトロの絵葉書で（①は銀座通り、②は日本橋通り）、内容は、信次郎が昨夜入京した事、農事試験場の開場式（二十五日 *2）に出席する分家の勇三郎と六軒駅（現JR紀勢本線・松阪市）で思いがけず出会ったので、東上の連絡を頼んだ事が書かれています。



さて、信次郎が上京した理由は「過日、在津之兩人（宮村隆基・千代子夫妻）偶然帰家致し、隆基少々不快之為め帰り候との事にて、症状色々承り、十九日棟本（現津市）へ参り一泊帰ると申候俛、同处より専門家の診察を受たく東上致、着のミ着の俛にて遠旅致候事故、宅にて

も打案居候俛、一卜先神田連雀町（現千代田区）阿久

津病院へ入院致度様申来候俛、小生昨日急遽東上致候」

とありますが、「本人病症未確定ニ候へ共」、「素より生命ニ云々する様の儀ハ毛頭無之症ニ御坐候間、此儀御放神被下度（心配しないで下さい）」と同日、長谷川七左衛門夫妻と息子・準三宛に書き送っています（No. 462-2-2）。

信次郎妻・琴も二十八日、孝子宛に「隆基病氣御心配おかけいたしました相すみません。」「阿久津博士ハ元順天堂（*4）に居られたのです。主人も此博士に手術をうけたのです。中々うで前ハよろしい方です。」「廿六日入院、廿七日手術ですが、大した事ハないでしよ、深くハ御心配被下ますな」（No. 462-2-4）と楽観的な手紙を送り、三十日には、長谷川家一同宛に「其後手術もだんく延引に相成、廿六日入院、昨廿九日手術すみ候よし、今朝早く電報参り候、主人ハ二、三日後の経過見て一、二日頃帰宅のやう申参り候、格別之事も無之候はん、深くハ御心配被下ぬやう頼上候、」（No. 462-2-3）と、重ねて記していました。

インターネットで関東大震災時の震度データベース（気象庁）を調べますと、名古屋観測所で震度4、津では震度3を記録しています。ところが、九月二日に琴が孝子宛に記した手紙は、「さすがに厄日とて、今日ハ空もようもわるうござります。一昨日ハよきおしめりて、皆々大よろこびでした。主人も昨日帰宅いたしました。」「十日頃にハ退院が出来そうです。室をかかりましたそうです。もう十九号室でハありません。病院

もまん員で、初めハよい室がありませんで、大そう暑く嬉しいやな室でしたそうですが、此度ハ新等（種方）にかわりましたさうで、大そうよき室だそうです。（No. 462-2-1）と平穩そのものです。当時、東京一名古屋間は東海道線で九時間もかかり（名古屋駅ヨリ主要駅ニ至ル賃金、哩程、到着時間表 附発時間表）大正十二年五月）、夫妻はまだ大震災勃発を知りません。それだけに、翌三日の手紙からは激しい動揺が窺えます。

「今朝一番で主人・準さん・駒田氏・長之助・車夫豊吉、五人出立してもらいました。いろく御めいわく御厄介おかけして宜御礼申上ます。とうそして命だけたすかり居るやう、神仏に祈願かけているより外ありません。私ハ今の処無事ですから御安心下さい」（No. 462-2-0）、発信者欄が「シ」二文字の電報「ア二一ヒギタク、ニニンサウサクニケサタツ」（No. 462-1-8 写真参照）は、勇三郎が兄に代って打ったと思われる。



信次郎も四日付で、「一昨夕ハ準三様御駈付被下難有奉存候、同夜出發準備致、昨早天同行五人（準三様、駒田老人、小生、間使（使者）、長之助、出入書生）出立、名古屋にて天幕（テント）・

ハン（*5）・防水合羽・鐘詰等之食料品相調へ、午下

（昼過ぎ）一時五分にて川口町二向ふべき筈二候処、中食中号外を二見致候二、食糧携帯の有無二拘らす入京を許さすとの事二、大ニ落胆仕、猶暫く情報を見て進退之

夜引返し、帰家仕候、一行ハ五時過列車にて川口町二進発相成候間、右御承了被下度候、」と詳細を知らせ、

「小生三十一日夜行にて一日午後帰宅仕候、もし一日相遅れ候際ハ、此災厄ニ遭逢致居候二、前夜出立致候ハ全く天幸を得候事に御坐候、」（No.462-19）と、琴夫人も後述しているように（No.462-24・15）、帰宅予定を早めた事を天の恵みと記しています。

「御心配かけました。兩人（隆基と千代子）天の助けか神仏のかごか、ふしきに命助かり長野までにげのびましたとの電報参り、ゆめでハなきかと一同よろこび居ます

何卒御安心被下ませ、どうしても助からぬものと思ふて居ました。一人ハ病人、一人ハ女の事、殊にかつてもわからぬ土地で、とても助かるのそみハないとあきらめて居ましたら、何と云ふ運がよろしかつたのでしよ、主人はじめ三人命ひろいをいたしました。付てハ後からおこし被下ました方々を日々心配して居ます。」（加減）
にして帰つて被下ハよろしいが、向ふてハ一しようけんめにさかして居て被下でしょうにと、実に心配して居ます。隆基ハ二、三日内に帰るやうの電報でしたが、皆様早く無事にお帰りをいのつて居ます。」

と、漸く胸を撫で下ろした反面、準三達が、隆基夫妻の

搜索に東上したまま入れ違いになってしまった事を深く案じています。また、被災者の実感が籠った左記の追伸も、胸を打ちます。

「世の中の事ハ実にわからぬものですな、わづか三日か四日の内ではなしんだりよろこんだり、本人たちもなきをされた事でしょうが、宅をはじめ皆様に一方ならぬ御心配をかけました。ほんに一寸先きハわからぬ世の中です。三谷・川口・山崎其他新類の方々ハ如何でしょう。横浜ハ東京よりもひどかつたやうですが、後藤ハとうなりましたでしょう、あのやうながげの上、殊にあぶない処心配して居ます。いづれも御無事をいのつて居ます。」（No.462-15）

なお、文中の山崎は「郷土資料室だより十一号」で紹介した山崎弥三郎、三谷は東京市本郷区（現文京区）丸山新町（現文京区）の三谷重隆を指します。

「実ニ今回者地獄之有様ニテ、死者如山積立アリ、行衛不明之者多く、生存者尋巡り、漸く昨夜方水道チヨホチヨホ出来り候、夜前は蠟燭火、瓦斯も不来、食料品は入荷出来候へとも、第一避難人宛、我々方へハ容易ニ不廻候、米ハ玄米耳也、」
「震動ハ小震トナリ、毎日七八回宛ハ御坐候、」
「昼・終夜も各町戸別ニ一名宛、警固ニ罷出候次第二御坐候、貴家様も宮村之入院を御心配御察し申上候、」
「準三様は、無事御帰勢相成候哉、定而汽車も御混雑之事与御推察申上候、」（九月八日 No.462-26）と「ミタニミナブジ アンシンアレ」（九月十日 No.462-13）との電報が残されています。

さて、術後間もない宮村隆基と妻・千代子は準三達

の上京を努々知らず、避難先の長野市五明館（*6）から「今回の地震は殊の外の大地震にて、倒壊家屋無数、それに引きつゞきての大火にて、小生入院中なりし神田連雀町の阿久津病院も全焼いたし候為、午後三時辛うじて上野の山に避難仕り候、同夜は其処に野宿いたし、翌日午後再び火災迫り候為、日暮里（現荒川区）まで落ち延び、汽車にて漸く赤羽まで逃げ、日夜赤羽駅にて夜を明かし、翌早朝川口町に出で、其処より汽車にて長野に参り申し候、」
「何分病中の事とて疲労も有之、両三日当地にて静養と疲労の静まるを待つて帰国仕る心算に有之候、」（九月六日 No.462-14）
写真は、テニスをする男性を描いた12cm×8cmの愛らしい封筒と、準三宛に無事を知らせていますが、準三本人はまだ帰宅していません。



両親の手紙には、「たいいていの家ハ東京にかんけいが御座りますから、いづれも心配でござります。私方のハ早く便りがありましたので、安心を致しました。付てハ準さんはじめ他の二人（駒田ハしの、井から帰りました）ハ気車も大こんさつの上よし、どれ程なんぎして居て被

下でしようと同心配して居ますが、便りハできず何共致し方なく日々其事計り申あげ居候、何卒して御無事にお帰り被下やうと、日々のつて居ます。此様な事なら行っていたくでハなかつたにと、くれく申心配いたして居ます。さそ皆様御あんじいたゝいて居ましよう、日々申暮して居ます。(母・琴より 九月七日 No. 4 6 2—9)、「此際東上致居候両人之為め、非常成御配慮相煩、恐調之至ニ奉存候、小生ハ幸ニ、当日前夜夜行列車にて出立致候為め其厄を免れ候も、在留之両人に就ハ到底絶望之者と痛心罷在候処、五日、県ニ於る救済協議会へ出席可致外出之間際ニ電報接手、長野大門局にて無事避難(*7)、一三日之内帰ると申来、夢かと計相喜申候、」(協議会を) 退場致し、辻様へ伺出、万事御耳ニ達し、早速電話にて(小生 蓋電話ニ候、叔母上ニ願上候) 御通知申上、甚失礼仕候、」一昨日駒田老母来臨相成、同作五郎氏ハ篠井駅(長野市)迄御同行被下候処、同駅にて乗換と相成候様にて、其混雑名状すへからず、窓より飛込者、車箱の屋根へ昇るなど、殆んど強者勝之有様に候、到底小生之想像通り、老軀の堪ゆべき処ニ非ざるを為し、早々帰還相成候由承り、是ハ一ト先安神存候、然るニ、外三人(準三・長之助・豊吉)之一行ハ、若手の事として無理ニ入京搜索被成之事、如何ニ困難万苦を排しての行動かと寔ニ案し申居次第ニ御座候へ共、」其内無事帰還被下候事と屈指待居候、」(父・信次郎より 同七日夜 No. 4 6 2—10)と、どちらも責任を痛感し、いたたまれない気持ち伝わつて来ます。

なお、文中に「県ニ於る救済協議会」とは、

☆ 米一万五区・味噌・醤油・缶詰・沢庵等の物資を罹災地に輸送。

☆ 各戸最低一升の白米と二円の義捐金を協力要請、学童にも一人五銭の義捐金を割り当てた郡・市町村が多かつた。

☆ 捺染・綿木綿を千万単位で購入し、県内各地の女学校・処女団を大動員して衣服を調製。

☆ 東京芝浦日出町に出張所並避難者相談所を設置し、三重県出身者の安否調査と物品給与を行う他、医師会による無料診察や大工の素養ある在郷軍人会による奉仕作業等、懸命な救援活動が実施されました(『三重県史 通史編 近現代2(上)』)

また、今号冒頭に登場した分家の勇三郎も、隆基夫妻が無事避難し静養中である事、愚息芳彦が無事健在である事、準三への感謝の気持ちを七左衛門に書き送っており、「長谷川家文書」からは、親族の絆の強さが随所に窺えます(九月八日 No. 4 6 2—11)。

そこへ、前回同様「シ」(信次郎)からの電報(二人 共 無事 避難)「ニニントモブジヒナンセルモノゴトシ、ユクエサガセドモフメイ」(九月八日 No. 4 6 2—12)が届きますが、「電話ニテ御通知ズミ」と附箋が貼られ、やはり情報の錯綜が見てとれます。

そのような中、九日に漸く帰宅した隆基と千代子の礼状は、心底安堵感の伝わる微笑ましい内容です(以下抜粋 No. 4 6 2—6)。

「本日御蔭を以て無事帰国仕候間、御安伸なし被下度候、承りますれば、叔母上様には小生等の安否を御心配下さ

れ、途中の危険をも御厭ひなく態々御上京下され候由、御厚情の程何とも御礼の言葉も無之、厚く厚く御礼申上候、震災の際は丁度食事中にて、誠に突然の事として大驚仕り候、午後三時ごろ辛ふじて上野公園内に避難し、同夜は其処に野宿いたし、二日午後まで美術学校(現東京芸大美術学部)内に止り居り候ひしも、再び火焰迫り申し候為、日暮里(現荒川区)まで落ち延び申し候処、幸にも発車せんとする汽車有之候ひし為直ちに乗車、赤羽に避難仕り候、翌日川口町まで歩き、其処より乗車いたし候、同夜漸く長野まで逃げ申し候、途中は御承知通りの混雑の上に、小生手術後の事として歩行自由を欠き居り、全く一時は閉口の極に達し申し候、」(宮村隆基拝 叔父上様 九月九日)

「私共ハおかげ様にて傷一ツうけませず避難致しました。何卒御安心下さいませ。」昨日中央線にての帰途も避難民にて山の如し、あの長いトンネルではもう皆が往生する様な思ひを致しました。その列車にてとてもつづいて名古屋や迄参れませんでした為、塩尻にて一列車後れ、夜やうく名古屋や二着致し本日無事帰りました。別ニ兩人共障りもなく元気でございますから、何卒御心配いたゞきません様御願申上キナ升、当時のいろく御話申上タ度い事ハ心ニ御ざいます、いづれ拝顔の上御話申上キナ升、」(千代子 宛名は五人連名*8 九月十日)

信次郎と琴も翌日礼状を送っていますが、準三は無事帰宅するも、東京搜索の疲れが出たよう、「咽喉症ハ如何と御案申候、御加養祈上候、」と、冒頭に見舞の言葉が記されています。また、「関東地方破天荒之災厄ニ

際し、在京兩人之為め、過般来ハ不容易御迷惑懸難有、
万々御礼申上候、戦地にも劣らざる紛擾裡ニ連日之御奔走、如何計御疲勞被下候事と察上候、就而兩人隊ハ想像通、一昨夜ハ名古屋ニ泊致し、昨日尔後(その後)無事帰家致候間、右御安神被成下度候、一時安否の程も無覚束存候ニ、千ニ危地を脱し候事、本人共之幸運ハ申ニ不及、弊家の天幸と感謝ニ堪へざる処ニ御坐候、「猶色々御影替被下候費用、御計算被下度、先々御持参願候金子ハ、昨日ことへ御戻しニ預り候へ共、御立用被下候分ハ無御斟酌(遠慮なく)被仰度願上候、」(信次郎九月十日朝 No.462-5)と、追伸に商用を記す余裕も窺えます。

「此頃中ハ実に何共かん共申やうもなき御心配をかけまして、御礼の申上様もござりません、準様もまづく御無事にお帰り被下まして安心いたしました。いろいろお咄しきゝまして、一方ならぬ御なんきをなしていたゝきまして、実に相すみません。兩人もおかけさまで、昨日十二時半白粉(*9)着にて無事帰宅いたしましたして、初めてやつと安心をいたしました。いろいろ咄しをきゝ、実に一生の咄しの種と申て居る事です。準さんさそおつかれ被下しましたでしよ、お障りも御座りませんかと心配いたします。少しのどもおいたために如何あらんとおあんじ申て居ます。とうそ御大切においとを頼ます。私方兩人ハどんなにやつれて帰るかと思ふて居ましたら、思ひの外兩人共、参る時よりもふとりて大元気で帰りましたから、何卒御安心頼ます。」(琴 九月十日 No.462-7 封筒表には「吉報」と書かれている)

ところがまたしても、準三からの手紙は入れ違いとなり、改めて「拝啓、長野五明館扇屋の方へ御出し下され候御手紙廻送、本日落手拝見仕り候、此度の東都大震災には、不幸にして小生等滞在中にて、御一同様に此上なき御心配を相かけ、誠に申訳なく平にく御ゆるしの程懇願奉り候、「皆々様の御蔭を以て、幸ひにも死傷のがれて何の障りもなく避難仕り候、「手術後の傷も幸ひ目下の処治癒の様子ト有之候間御安神なし被下度候、「明日御邪魔仕り拝顔の上、御礼申し述ふる心組(心積り)に有之候、」(隆基・千代子 九月十三日 No.462-2)と詫び状を送るも、十四日の訪問は非常な風雨で取りやめとなり、「先日ハ御丁寧に長野へ御手紙いたゞき有難う存じました。又、昨日ハ御葉書給はりおそれ入りました。「承りますれば、どこか叔父上様にハ御帰途駅にて御発熱四十度にも上りました由、誠におどろきました。私共の為にとんだ御やつかひをかけ、実に何とも申わけも御さいません。」「時節柄とて、此度ハ雨や風にまで、どんな事が起つて来ぬとも限らぬといらぬ心配を致して居ります。」(千代子 九月十五日 No.460)と、叔母・孝子宛に封書と葉書を書き送っています。

また、篠井駅で東上を断念し、椋本村(現津市)へ引き返した駒田作五郎も、「先般来は、宮村家兩人の身上につき、一方ならぬ御心配相懸、且つ危険を犯して御捜索被下、誠ニ有難御厚情、深く御礼申上候、先日御三人様御揃ひにて御帰り被下候趣、また隆基共兩人も無事避難致し元氣にて帰宅致し候由承り、大安神大恐悦仕り

候、「当方本家の案否未だ不明にてあちこち致し居り候為、大延引仕り申訳けなく平ニ御海怒給り度く、自然代筆にて失礼乍ら、取りあへず御礼迄、」(九月十三日 No.462-8)と、代筆にてお礼とお詫びを認めています。

さて、ここで、本章の最後を飾る三枚の写真を紹介しましょう。

最初の二枚(長谷川家追加文書 No.43)は、明治四十二年五月当時、サンフランシスコ在住の親類・倉田はつ子から送られた記念写真です。若かりし日の孝子嬢が初々しく、裏面には「私も本月十六日出航の天洋丸(日本で初めて一万吨を超えた貨客船)で帰国するよなんだか折角なれたのに今かへるのがいやな様な気がするよ」「倉田一家 此犬も内之次男です」と、大変ユーモラスな事が書かれています。

もう一枚は、難解な篆書(中国古代の漢字)を楷書で分かりやすく編んだ「篆楷字典」の編者・丘裏二が、大正十四年三月に進呈した写真(同 No.44)で、孝子夫人の交友関係が窺えます。

*1 長谷川七左衛門の戸籍抄本(大正五年九月十八日 No.1445)によると、戸主・長谷川七左衛門は弘化元(一八四四)年三月十八日生、関東大震災時は満七十九歳。三男・準三は明治二十五(一八九二)年一月四日生、満三十一歳であった。

*2 津市から鈴鹿市に移転した三重県立農事試験場は、現在三重県農業研究所と改称され、松阪市にある。

*3 3万6千坪(一町歩二三千坪)

*4 江戸時代後期の天保九(一八三八)年、蘭方医の佐藤泰然が薬研堀(現東京都中央区)で開いた和田塾を起源とし、百八十年以上の歴史と伝統を持つ。

*5 明治時代は文明開化の名の下に西洋の食文化が普及し、同七年に木村屋があんぱんを開発、大正二年に田辺玄平が国産イーストを開発する等、パン産業が飛躍的に発展した時代であった。

*6 善光寺門前町の旅館「五明館」は、江戸時代、大名が止宿する本陣が満室の際利用された脇本陣であった。小説家・池波正太郎が眞蹟にし、『よい匂いのする一夜 東日本編』にも登場するが、昭和末期レストランとなり、東日本大震災の影響で平成二十三年閉店。旧館の一部が善光寺郵便局として残されている。

*7 「郷土資料室だより」11号最後にご紹介した田原啓祐氏の詳細な研究論文『関東大震災における通信事業の復旧と善後策』に、「被災地全域を網羅した被災者収容施設を用意する事は到底困難なため、東京収容所本部（東京通信局内）の下に各出張所を設け、さらに各郵便局は、出張所から食糧の配給を受けて少人数の被災者を収容していた」とある。

*8 七左衛門・猶（祖父）、進三・孝子（叔父叔母）・鶴子（叔母）

*9 本来白粉町は、射和から移り住んだ人達が、丹生で採れた水銀で特産の白粉を作ったために名付けられた松阪市の町名であるが、宛先を「伊勢国白粉町」と記した葉書は山中家文書に多数見られる。

『写真通信』に見る関東大震災

さて本章は、文章のみではイメージしづらい大震災の惨状を、『国際写真通信 続大震災記念号』（大正十二年十月一日・大正通信社発行）に沿って見て行きたいと思います（写真は表紙・太字は本文抜粋）。

表紙裏には「一夜にして廃都となれる震災火災画報」との見出し付きで、「帝都を昔の武蔵野の原野に引戻したる大惨事」による「焼失戸数及罹災人口区別」（日本橋と深川は百%焼失！）・「傷病者の救護数」計二万七千七百二十八名・「死体収容者数」計五万九千四百七十一名等、数字を挙げ、「長門・陸奥・扶桑・金剛・霧島・比叡・浅間・八雲」その他の艦船が、救援物資や避難民

の輸送、交通・通信作業及び警備に従事したと記されています。また本文中にも、鉄道が破壊されたため、第一・第二両艦隊の軍艦総出で大阪方面の連絡運輸に従事したと書かれています。

巻頭には、在りし日の賑いを描いた歌川広重の「東海道五拾三次・浜松」（*10）を掲載し、全面オレンジに塗り潰された「丸之内附近の猛火」、倒壊した永代橋と吾妻橋（写真）、「八階から上がぼつきりと折れてしまった」浅草名物十二階（凌雲閣）等、危険家屋の陸軍工兵隊による爆破、本所被服廠（工場）に避難し焼死した三万二千人の骨の山……といった凄惨な写真が続きます。

特に、先述の宮村隆基夫妻が最初に野宿した上野公園に群がる罹災者達や、焼失による車両激減と無賃乗車の許可がもたらした「大繁昌の交通機関」（写真）は、正に彼らの実体験さながらです（P4参照）。

なお、最終ページの「編輯余録」には、平常時すら難所中の難所であった箱根八里を徒歩で往復した写真班への慰労と共に、「此大震災のため、稍脳裡から忘れられんとして居る、かの七十号艇の沈没（*11）、其引揚が遅々として進まない」事を遺憾とし、「八十有余の生霊が仮屋沖（瀬戸内科淡路）に月余（一ヶ月余り）も其俛になつてゐるのは実に情として忍び得ないことでもあります」と、胸を打つ記述が見られます。こうして掲載された写真は、亡くなった柴山大尉と林少佐、難航を極める引揚作業中、潜水艦に綱をかけた潜水夫の殊勲を今に伝えていきます。

*10 天保十一年に佐野喜兵衛が刊行した「佐野喜版」。紀広持の狂歌「春の日の あゆみもおそき あしたつ（鶴と女城主の名を重ねる） かすむすかたや ちよの浜まつ」が添えられている。
*11 大正十二年八月二十一日、八十五名を乗せた潜水艦第七十号が試運転中に沈没し、甲板に居た七名以外は遭難の憂き目にあつた。



長谷川準三の鮮満部隊慰問旅行

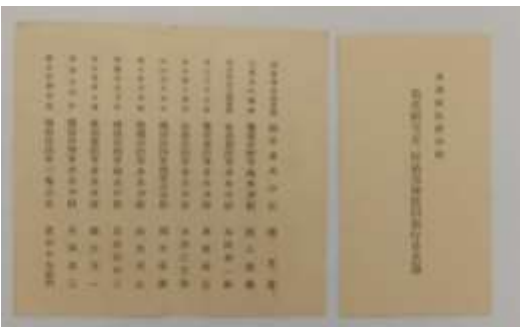
さて、話題を『長谷川家文書』に戻しましょう。入院中に関東大震災の憂き目に会った甥夫婦の大捜索で、四十度もの高熱を出した熱血漢・長谷川準三にまつわるもう一つの文書群は、津聯隊区将校団による「戦史研究並ニ鮮満部隊慰問旅行」（昭和四年）です。

写真の参加者名簿には、

津聯隊区司令部・陸軍歩兵中佐 橋正雄を筆頭に、後備役陸軍砲兵中尉・長谷川準三を含む十一名が名を連ねています（No. 461-1）。

本章では、準三夫人・孝子の日誌（昭和二年十月四日～同四年九月十八日 長谷川家追加文書 No. 32）と照らし合わせながら、その日程を辿りたいと思います。なお本史料は、「長谷川七左衛門」と墨書した反故紙を表紙として横半帳に綴じ直し、「ひかへ長 昭和四年九月三日 主人支那行留守中 手拍あり」と書かれています。

孝子はまず、「昭和四年九月三日出立、準三満州行、清天今日ハ随分暑く、夕方一寸おき風（*12）ニなる」と準三の旅立ちを記し、八日の欄には「京城（現ソウル特別市）名品（別嬪）の写真一葉入あり」とあります。これは、「名産の妓生 写真を一葉同封しま



す。」と書かれた、「朝鮮婦人の水汲み」カラー絵入りの封緘葉書（写真 No. 461-8）を指し、「釜山から夜行列車は内地と異りて広軌（レールの間隔が国際基準の1・435メートルより広いもの）ですから、寝心地も頗るよろしく永登浦に着いて、朝鮮第一の皮革会社を見学し、全裸の猛烈なる労働を見て龍山着、軍司令部・歩兵七九・砲兵二六を慰問し、疲れた足を引きづって宿舎二入りしました。」「此処迄にては別ニさしたる違国の情緒はありますが、明日鴨緑江（中国と朝鮮の国境になっている川）畔まで出ますと、大分と変わった気分になるでしょ」と、期待を込めて記しています。

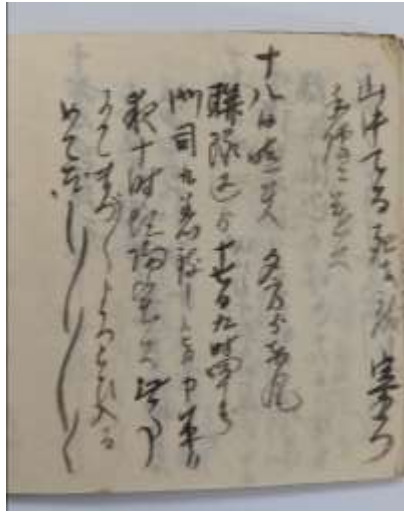


さらに、十二日と十七日の欄に孝子が記した「十一日付津聯隊区方は、長春（現吉林省都）着の旨はかき来ル」、「聯隊区方津迄、十八日二帰るとの事、はかき来る」に対応する物が写真の印刷葉書です。津聯隊区将校団は満州見学団（慰問団）から小まめに電報を受け、その都度、参加者全員の留守宅に印刷葉書を送っていました（*13 No. 461-5）。なおこの間、南満州海城野砲（野戦部隊の主火砲。歩兵と協同して戦闘する事が多い）の樋口（十二日 No. 461-4）と矢田大次郎（十四日 No. 461-6）から慰問の礼状や、大正十年に建造された「ばいかる丸」乗船御礼の絵葉書（写真参照・十七日 No. 461-3）が、白子の準三宛に届いています。



そしていよいよ、「ひかへ長」の最後は「十八日 晴

天、夕方方東風 聯隊区方十七日九時四十分 門司（現北九州市）江着致し候旨申来り（*13の五通目）、夜十時頃帰宅ス、無事にてまづくよろこひ入る、めてたしくくく」と、歓喜に溢れた微笑ましい言葉で締め括られています（写真）。当時の世相が、日本の対華二十一カ条要求を巡って中国全土に波及した反帝国主義・反封建主義運動、奉天近郊で起きた張作霖爆殺（昭和三年）やアメリカの株価大暴落に始まる世界大恐慌（同四年）等、非常に不穏で不安定な中、家を守った孝子夫人の心情がストレートに伝わる文面と言えましょう。



また、帰国後の九月二十日付で、津聯隊区将校団から準三に送られた案内チラシ（写真No.461-9）に「博覧会内満蒙参考館」とあるのは、昭和四年の第五十八回式年遷宮記念事業として、翌年三月十日〜五月十日に神都公会堂前（現宇治山田駅前）で開催された「御遷宮奉祝神都博覧会」を指します。

京都御所から下賜された神楽舎を修築し、昭和天皇の即位大礼に用いられた御物（所蔵品）や勲章全種（宮

内省蔵）等々を展示した大礼記念館をはじめ、歴史館・国産館・台湾館・朝鮮館・樺太（*14）館等々を開設し、四十四万五千九百九十六人の人出で賑わいました。



写真の『満洲写真帖』は、この時、満蒙参考館において定価二円で販売されたものです。



映画化された旅順の二百三高地記念碑、「郷土資料室だより」第7号で紹介した丹羽八平が戦死した奉天、現在も長春人民政府第一幼稚園に使われている長春神社、「大連花柳界ニ於ケル一流ノ名妓」（写真）といった写真が満載されています。

もう一枚の写真は、準三達が慰問に訪れた海城野砲

聯隊で、先述の樋口・矢田両氏が写っているかも知れません。写真下には「海城ハ、日清・日露両役トモ逆襲地点トシテ軍事地勢上有利ノ位置ニアリ、凶ハ我ガ野砲兵ノ駐屯兵營ナリ、」と記されています。

*12 沖を（または沖から）吹いて来る風。

*13 釜山上陸（五日）・奉天到着（九日）・長春到着（十一日）・見学と慰問を終えて大連出発（十六日）・門司（現北九州市）到着（十七日）の五通。

*14 江戸時代後期に間宮林蔵が発見し、樺太・千島交換条約でロシア領となったが、日露戦争後から第二次世界大戦前迄、北緯五十度以南は日本領であった。

